

笹もつちちゃんに捧ぐ

手弁当

佐座雄造

弁当といえば横川は峠の釜飯、富山の鱒寿司、高崎のだるま弁当、浜松の鰻弁当と数々愛着をもって可愛がられしものあれど、その値は近來上がるに上がって、たかが幕の内でも四百円。そんな金、山へひよいと出掛けるのに買うのも惜しい。

食糧にしたって同じことで、こうなれば少しきばって塩鮭、タラコ、浅草海苔を巻いておにぎりつくった方が量もあるし安くて結構な話で、時折はゆで卵つけ加えたりする。

山に行く仲間は揃って金が無い。米炊いただけで済むなら、味付け海苔に梅干し入れてビチャビチャ握ったもの、アルマイトの弁当箱に昔を偲ぶのり弁風・様々に自分の器用さ、思いつきのよさ威張りあい、それでもクロワッサンだのつまむ者いれば、思いつきのなさを貧乏人のひがみも手伝って馬鹿にし、「手弁当が一番エエ」と大声。

飯時になって、みんなのザックから出て来た弁当の数々。塩のつぶ光ったおにぎり、小さくてふた口でなくなりそうなもの、海苔が隣のおにぎりにくっついて禿げたもの、果てはビスケットだけだったり食べていると、笹本一人ザックをごそごそやり、中からタッパウェアの包みを出す。

「何やそれ？」と視線集中したところで蓋を開け、中に入ったカマボコにキューリ、ハンバーグにソーセイジとギッシリ詰まったおかずの数々。ギッシリ入ってないと片側に寄って空き地がみえ、痩せ細ったおかずが残飯の様相を呈するのだが、このおかずはギッシリとしてひとつも動かぬ。

「わーすげー！」と皆寄ってたかって手を伸ばし、まずは摘まんてから「これ、どうしたん」と質問浴びせ、「・・・寮の子につくってもらった・・・」と笹本ボソボソ言い。みんな「キエー！」と感嘆の声。

続いて自分の手にもつおにぎり、よく手を洗わずに握ったの思い出し、うら若きOLの握りしおにぎり、きとんと片付いた若い女性のおいブンプンの台所、ピカリと光ったステンレスの流し台に、ツーンと響く音立てるまな板で、切れ味もうややかに、キューリの斜めに切った線みればゾクゾクつとさせ、やけに自分のおにぎりが汚くみえてくる。

「やっぱり女の子がつくると違うなー」ときめ細かき品の数々に感激の涙。

銘々勝手にこれをつくった、若きOLの顔、指、爪想像し、「きつとエライ美人やで」と勝手に決め、手に残るマヨネーズ指ごと口の中に入れてくるくる回し、嘗めてはピチャピチャと音を立てる。

彼女のいない男は嫉妬と尊敬をもって笹本をみつめ、妻子のある男は、若き娘の味に目もうつろ。新たな恋への道を歩き出したような気分。

笹本一人英雄の如き顔。それでも照れ隠すように、パンパンと音高らかにパックを仕舞う。呆然として片手のおにぎりに気づかなかった男ども、その音で我に返り、目もうつろに自分でつくったおにぎり喰い、無口になってただ口が動くのみ。力の抜けた顔で「母ちゃんつくってくれるだろうか」「誰ぞに頼んでみつかないー」「きたねーよ、一人楽しんでやってさ」とぶつぶつ、文句とも悔恨ともつかぬことを言い合い、ひとり笹本は背筋ピンと伸ばして週刊誌のヌードをめくりながら、くだくだいう皆に向かって一言ガンと言い放つ・・・「なんならつくらせよーか」。

昭和四十九年九月三十一日